

マッチ擦るつかのま書に闇ふかし ～仙台大生Zのメディア生活～

For a moment when I strike a match, the book becomes dark
～Media life of Sendai University student Z～

日下 三男¹

Mitsuo KUSAKA

子どもや若者が新聞や本を読まなくなったという。仙台大学で学生に日々接している身として実は「その通り」「いやそうでもない」と明快に答えられない。理由は読書関係の調査によってはインターネットが普及していなかった1980年代と読書量がほぼ変わらないといったデータもあるからである。しかし、これらのデータを若者の実際の私生活とダブらせて考えたとき、活字離れとともにネット漬けの様子が鮮烈に印象付けられる。その光景は、歌人で劇作家の寺山修司（1935～83年）が詠んだ短歌を本歌取りとしてなぞらえれば＜マッチ擦るつかのま書に闇ふかし＞とまずは上の句が浮かぶ。下の句を求めて仙台大生の数人と語り合った。

キーワード：本，ニュース，メディア，スマホ

■スマホは世界とつながる「窓」

ある新聞の読者投稿欄に先日「若者は本を読まず、行く末が心配」という趣旨の記事が載り、また別の日にはテレビの情報番組でコメンテーターが「活字離れが顕著で中高生は新聞や本、雑誌を手にとらない」と嘆いていた。

日頃、大学生を相手に活字系メディアを軸にそのありようを教えている立場としては「ごもっとも」と受け止める。同時によくよく考えて、それはインターネット時代のなかで必然の結果であり光景だろうと何の裏付けもないまま思い込んでいる自分にもはたと気づく。いい加減なものである。

このところ流行り言葉みたいに聞かない日はない「エビデンス」がないにもかかわらず、若者の活字離れ現象を信じ込む。時代だからー。こんな不確かで定義しづらい文言を都合よく使って納得しようとする浅はかさは反省しなければいけない。

実際よく分からない。次ページの図は全国学

校図書館協議会が毎年5月を基準月として調査している「学校読書調査」の一つで、小中高生が月に1冊も読まない人の割合（不読率）＝同協議会ホームページより掲載＝を表している。

どうだろうか。高校生は2000年代に入ってからほぼ40～50%台で横ばいである。月並みな言い方をすれば、昔も今も変わらない。

真実に迫りたいなら直接聞いてあれこれ教えてもらうのがいい。

仙台大学の学生Z。男？ 女？ どちらでもいいし、頭に浮かぶまま性別を想像すればいい。学年？ 何年生でも構わない。その彼（彼女）は普段どんなメディア生活を送っているのだろうか。人物像を少々補えば、体育学部スポーツ情報マスメディア学科でメディアモデルの関係科目を履修しているとだけ断り書きしておく。

Zはいつも眠い。四六時中まぶたが重い。夜が遅いから仕方がない。だから朝は枕元のスマートフォン（スマホ）をまずはチェックする。

¹ 仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科 教授

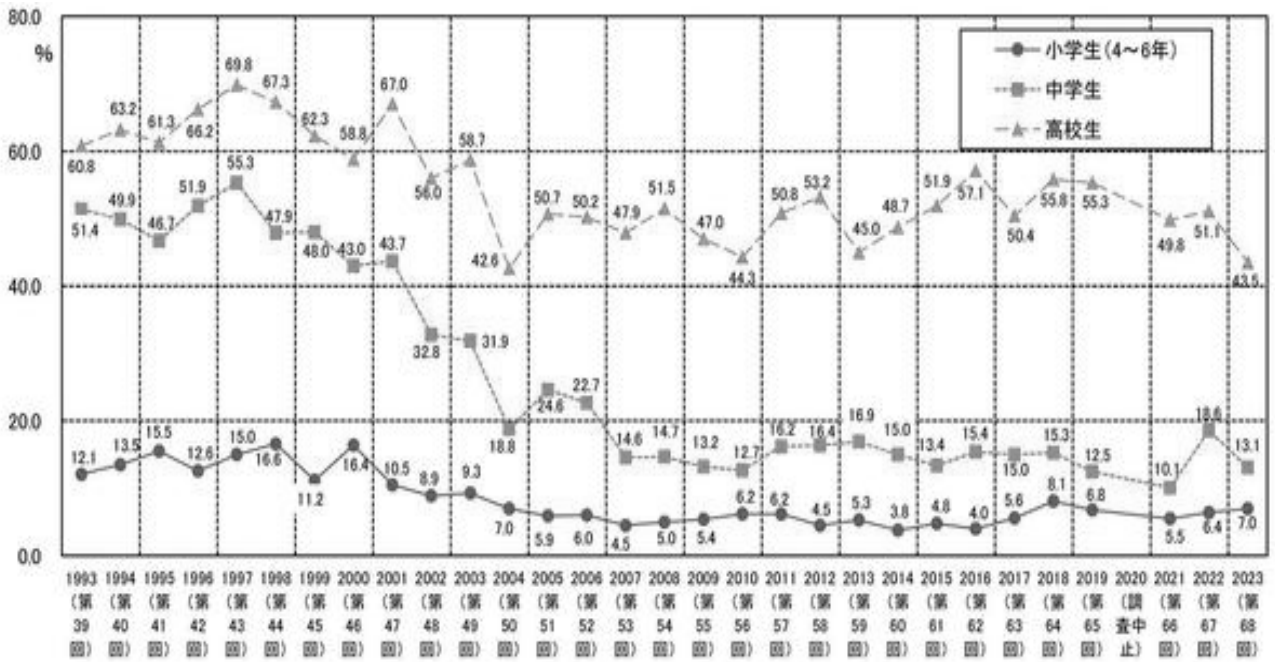


図:小中高生の書籍不読率推移

生まれたときからインターネットの利用環境が整い、デジタル機器はいつも身の回りにある。

ネット上のさまざまな情報(テキスト・画像・動画など)の閲覧を可能にするウェブに接するのはもはや当たり前の行為で、まさにそれは日常ということになる。

「どれどれ」。最初にのぞいたのは SNS の LINE (ライン) の着信有無、続いて X (エックス、旧ツイッター)、インスタグラム、TikTok (ティックトック) へ。これで「友だち登録」あるいは「フォロー」した人・団体とのつながりをあらかじめ確認できる、と自分なりに思っている。

友だちとの関係性は非常に重要な意味を持つ。何といっても社会との接点だからである。大げさに言えば世界とつながる「窓」と言ってもいい。そこから吹き込む風は情報を運び、閲覧する本人はこの空気を胸いっぱい吸い込む。そうこうして脳みそは目覚め、いよいよ今度は自ら友だちに「いまの心境」を発信する。息を吸っては吐き、吸っては吐き、その繰り返し。一日の儀式みたいなものである。

X やインスタグラムでフォローしている対象はおおよそ 500 前後。中学や高校時代に出会った友だち、プロ野球やサッカー J リーグ関係の有名選手、エンターテインメントで注目するアーティストらの動向が続々入ってくる。「おっ!」と気になる発信内容に接すれば、即座にヤフトピ (ヤフーニュースのトピックス) や LINE ニュースで

関連情報をチェックする。「そうしないと仲間と会話できない。情報は大事」と訴える。

「おいおい、旧ジャニーズの性加害や自民党の裏金事件、能登半島地震だってある。こういう重大事の『今』はどうなってるのよ? ちゃんと知っておかないといけないぞ」と話題を振ると、「いや何となくは分かってます。だってヤフトピ (ヤフーニュース・トピックス) なんかに大事なニュースは出てきますから。見出しを読んでそれなりにチェックしてます。ま、ゆる〜くですけど」との返答。

「何となく」、「それなりに」、「ゆるく」。学生と話していて、これらの言葉が飛び出したときは要注意だと肝に銘じている。Z 自身はこれらの言葉を、百パーセントではないがそれに近い感じで事態を把握していると思込んでいるフシがある。分かっている内容は見出しの部分だけで、実は中身の濃い部分は知らないから全体像をつかみ切れていない。そのため時事問題を都度話し合おうと思っても難しい。

■メディアはニュースを押し付ける

どうしてこうなんだろう。なぜこれほどまでにいろいろなニュースに興味関心を持たないのか。

Z は屈託なく言い放つ。

「世の中はだいたい分かればいい。輪郭って言ったらいいかな、社会の大まかなことが理

解できればいい」。続けて「先生はニュースの解説なんかでよく事実とか真実とかってよく言うけど、本当のことって実は誰にも分からないでしょ。分からないのに分かったふりするのにも変じゃないですか。何と言ったらいいのかな、メディアはニュースを分かったふりして押し付けるようにしてくるから、こっちは何となく受け入れられないんですよ」。

メディアでニュースを忌避する傾向はここ数年、各種調査でより強まっていることがうかがえる。

英オックスフォード大学ロイタージャーナリズム研究所が毎年発表する『デジタルニュースレポート』2022年版は世界各国のジャーナリズム関係者を驚かせた。日本、米国、英国など世界46の国・地域で9万3432人（日本2015人）を対象にオンライン調査し、多くの人たちは定期的にニュースを受け取っているが、世界平均で38%はニュースを避けることがあると回答した。5年前の17年調査から9%上昇した。その理由で最も多いのが「ニュースは気分を落ち込ませる」約36%で、特に35歳以下でこの傾向が顕著だった。日本はニュースを避ける割合が14%と世界の中で低い値だった。

この調査の同じ質問項目は翌23年になると、新型コロナウイルス禍で各国・地域の対応が変わったことでやや改善した。世界平均は36%と2%減り、日本も3%下回った。

Zは話を続けた。「例えば旧ジャニーズ事務所の性加害問題をみればよく分かる。こんなふうに社会で大きな問題になったのはイギリスの公共放送が2023年春にBBCが放送したからでしょ。それから週刊文春をはじめとして国内週刊誌が火を付けた。その流れでようやく新聞やテレビが後追いするようになったんじゃないですか。授業でも先生はそう言ってました」

この説明、何とも「ゆる〜く」把握しているが、はなはだ正鵠を射る指摘とは言い難い。

そもそもジャニーズ事務所の性加害に絡む話題は世紀をまたいでメディア界に横たわり続けた。1999年から2000年にかけて「週刊文春」

（文芸春秋社）が14週にわたって告発記事を掲載し、この一連のキャンペーンに対し事務所側が名誉棄損で訴えたものの、司法は結局04年に性加害を認定して判決が確定した。にもかかわらず多くのメディアはこの事実をニュースとして報じなかった。記事化したとしても紙面の扱いは1段見出しの「ベタ」だった。

メディアの腰の引け方はさらに付け加えなければいけない。

事務所の草創期に活躍した男性4人組アイドルグループ「フォーリーブス」（1967〜78年）のメンバー、北公次が1988年に著書『光 GENJI へ』でこの問題に言及しながら、新聞やテレビは見向きもしなかった。その状況下でわずかに取り扱ったのが当時アダルトビデオ（AV）業界で鳴らしていた村西とおるで、彼はビデオによる『映像版 光 GENJI へ』を翌89年に作った。インターネットのない時代、AVが関心を寄せたという「際物」ニュースがやがて時を経て社会を揺るがす問題になっていった流れこそが歴史なのである。

Zはこれを知り、驚くことはない。メディアはやっぱりだらしがない、と改めて認識する。信頼度は地に落ちてゆくばかりといえる。

伏線のデータはある。国境なき記者団（Reporters Without Borders、RSF）が毎年、世界各国を対象に発表する「報道の自由度ランキング」で日本は2023年に68位。前年から三つ上げたとはいえ、「政治的内容」「経済的内容」「法的枠組み」「社会文化」「安全性」の5項目で国際基準に照らすと50位以内にも入れない。

そしてZは合点がいったとばかりに独（ひとり言（ご）つ。「太平洋戦争が勃発する前後、新聞はだらしなかったらしい。授業で習ったけど、軍部が主導する大本営発表に沿って報道をした。過ちを犯している」

メディアの向こう側に靄（もや）がかかっている。付度（そんたく）、しがらみ、こびへつらい..。心情としてメディアは信用できなくなっている。

■テレビ業界のバランス感覚を疑う

とりわけテレビ離れは顕著である。NHK放送文化研究所が行った「2021・22年の国放送サービス接触動向調査」（『放送研究と調査』2022年11月号）によると、NHKと民放を合わせたテレビのリアルタイム放送で1週間に1日でも見られているかを示す「週間接触者率」は、Z世代に該当する年層が前後の年層より落ち込んでいるのが分かる。13〜19歳で68%、20代で51%とほぼ半数が接触していない。2015年にスタートした見逃し無料配信動画サービス「TVer」にある程度流れているとはいえ、テレビはもはや単独で時代をけん引するメディアではない。

メディア業界のこうした地殻変動をZはどう捉えているのか。

放送関係者のバランス感覚をまず信用していない。Zは「面白ければいいって、昔は割り切

って制作していた。内容がいいも悪いもそれが時代を作っていたのに、今はその感覚が時代とマッチしていないし挑戦する感じも歌わない」とみる。結果として「マスゴミだから」とさげすむ。

携帯電話やインターネットの普及で急激に変わったメディアの多様化と、これらの環境変化でメディアの利用形態もマルチ化していくなかで、テレビ放送は後追いするのが精いっぱいであるかのようなのである。かつて時代を先取りしていた面影を画面に見いだすのは難しい。

1953年、日本で放送開始してから71年。テレビ離れの要因は何よりも個性や魅力を失いつつあるからである。特長の速報性・同時性、影響力、娯楽性、知性・教養といった点がいくつかインターネットに侵されつつあるのは言うまでもない。

いろいろな機能を併せ持つテレビはなぜ元気をなくしたのだろうか。

日本初の番組制作会社「テレビマンユニオン」の設立（1970年）に参画した萩元晴彦（1930～2001年）、村木良彦（1935～2008年）、今野勉（1936年～）による共著『お前はただの現在にすぎない テレビになにが可能か』（朝日文庫、2008年）を読むと、その答えがうっすら見えてくる。

同書の中で、テレビとはパブリックと私性の関係性を踏まえることが重要であるという言説に注目したい。公共性・社会を担保する器で同時にプライベートを保証するというのは成り立つわけではなく、しかし、番組を制作するうえでこの難題に取り組むことこそが現場の表現者になるのである、とも言っているよう。問いと答えを探し続ける作業はやがて時間＝歴史を映してゆくことにつながり、テレビは再び輝きを放ってゆくに違いない。

テレビ談義をしていたZは突然、新聞のテレビ欄を見て「各局の夜の番組は、あの街この街の料理をタレントが食べ歩きする内容のものばかり。くだらない。何が面白いのか、よく分からない。テレビって自分に『刺さってこない』のが致命的」と言った。何一つメッセージ性をそこに見いだせない、とも。

「だからユーチューブなんだよね」。多種多様な領域を網羅する動画共有プラットフォーム「YouTube」は自由気ままにオンデマンドで楽しめる。少しは教養を身につけて賢くなりたいし、AIのアルゴリズムによって管理されようがお薦め番組の中からチョイスし続ける。

寝ても覚めても動画漬け。部屋にいても教室にいても、道を歩いても食事をしていても、ひたすら見る。「（見ていて）疲れる？ 全然問題ない。むしろ社会が今どうなっているか分かる」と語る。表情は意気軒高そのものである。

ここでふと思い出す。フランスの詩人、ポール・バレリー（1871～1945年）の言葉。〈われわれは後ずさりしながら未来に入ってゆく〉『ヴァレリー 知性と感性の相剋』（岩波新書、清水徹著、2010年）。ボート競技で漕ぎ手は後ろ向きでゴールへ向かってゆくものである。その光景はなぜかZの日常と重なってしまう。前方に何かを見据えて歩いていく者の姿との違いをどう感じるか。確かさと力強さ。答えは言うまでもないだろう。

■「めくる」行為がなくなる？

Zの普段の暮らしぶりを「活字」という視点で捉えてみよう。

新聞は読まない。毎週・毎月、定期購読する雑誌もない。書籍？ 部屋にない。だからページを繰ることすらない。ただしコミック系の単行本は友人と貸し借りして結構読む。「あ、紙媒体は少しだけ。部屋が本だらけになったら片付けが大変。だから漫画はほとんどネットでダウンロード。でも、お金がすぐ飛んでいくから購入は気を付けている」と明かす。

本に囲まれる光景が窮屈極まるという発想は、本稿の筆者のような世代からすると「本は教養を培う財産ではなく、あくまで情報が集まったデータとみている」と感じる。加えてカネがかからぬ暮らしを志向する、何とも経済合理性の備わった人物像が浮き上がる。

ただ、気になるのは連なる文字を追う目はともかく、「読む」行為を手助けしているのがスマホやパッドの液晶画面の上をスワイプやタップと称して軽やかに触れている親指と人差し指だけということである。紙媒体の本を読むということと、実はそこが大きく違うのだと指摘する人がいる。

メディア評論家粉川幸夫（1941年～）は著書『メディアの臨界 紙と電子のはざままで』（せりか書房、2014年）で「本の危機と再生」を論考している。

粉川はまず、「本」の定義を情報の束として扱えばそれはデータであるといえるが、情報に還元できない物的な形態や要素があるとも説く。目の前に存在する紙の束を「めくる」行為こそが読書の特徴ではないかという。

感傷交じりにこうも書いている。本のページをめくるのはどこか札束を勘定する手の身振りに似ている、と。クレジットカードやさまざまな電子マネーが好まれる時代に紙幣をはじめとする現金のやり取りが消えつつあり、同じように本もその道をたどるかもしれない。とはいえ、粉川は短兵急に結論を導き出してはいない。

逆に手と本との関係は未知の可能性を秘めており、現在の物的特性にこだわらずに再生の方策を探っていけば本はきっとよみがえるに違いないと指摘している。

■紙の本は風前の灯

「めくる」行為を粉川と同じように読書体験の特徴に挙げている人がいる。

晶文社の元取締役で評論家の津野海太郎（1938年～）である。自著『読書と日本人』（岩波新書、2016年）で、電子書籍と紙媒体との違いはページを手触りで一枚一枚めくってゆけるかどうかであると記している。指の手触り感や記憶として刻まれ、人を豊かにする。身体的な動きが思考を深めるためには欠かせず、本を直に手に持ってその厚みと重さを感じながら、ページをめくり印刷文字を読み込む。こうした過程で頭に浮かんだ事柄が思考と言えるのである。

ただ海野は電子書籍には早くから理解を示していた人でもあった。出版業界の関係者による「電子書籍コンソーシアム」が設立された1999年よりも前にデジタルの波を肌で感じ取っていた。その見方は自著『本はどのように消えてゆくのか』（晶文社、1996年）に詳しく書かれている。

<本にはモノとしての面だけではなく、長期間、特定のモノとつきあいつづけることによって私たちのうちにかたちづくられた「習慣」としての面がある。紙と活字の本が、映像としての本、仮想現実としての本に「まるごと」とってかわられるためには、モノのかたちやしくみだけではなく、人間の生活習慣、本とのつきあい方が、完全に、それこそ細胞レベルで変わっていなければならない。これは私たちが生きる日々の安心感の根拠にかかわる。人間の側にそれなりに安定した新しい読書習慣ができあがらなければ、古い本は、いくら消えたくても消えることができない。モノとしての電子本ができあがり、私たちは新しい安心感の根拠を手に入れる。やはり、ゆうに百年単位の時間がかかるのではなからうか>

紙の本はいつの日か消えるだろう。しかし、人が身につけた生活習慣、つまり「めくる」行為を手放さない限りは何とか持ちこたえてゆく。

粉川は紙幣を例に出して未来社会の在りようを語った。筆者もここで投げかけたい。カレンダーはどうだろう？ そう、暦である。一家に、アパートの部屋に壁下げあるいは卓上式でもいいから一つぐらいあるのではないか。日ごと、月に一度誰もがめくる。

ここでZは即座に声を上げた。「ない、ない。あり得ない。スマホで見られるし、時刻だって一発で分かる」

■本は手になじむ「記憶」

古いスタイルつまり紙の本は風前の灯である。

「記憶」は文学の世界でしばしば重要なテーマとして扱われている。物語は基本、時間の流れで展開されていて登場人物と出来事が浮き出る。過去と現在、そして未来を読むところが面白い。

吉本ばなな（1964年～）著『ひな菊の人生』（幻冬舎文庫、2006年）は、思い出が核となり展開する。

母と死別し、現在は叔父・叔母夫婦が経営する焼きそば屋（お好み焼き屋）で働く20代の主人公ひな菊。来る日も来る日も黙々と焼きそばを作る。もう一生分作ったから食べたいとは思わない。健気。かわいらしい。上昇志向まったくなし。そんな日常を送りながら、ふと幼いうちに別れた親友ダリアを思い出すときがある。母と一緒にブラジルに渡り、元気なんだろうか。

そんなある日、ひな菊に知らせが届く一。

喜びも悲しみも、怒りも慈しみも、人は記憶の古層で感情を育むところがある。性格だけでなく心の発露があるのではなく、加えて過去の体験がモノをいう。幾重にも思い出が折り重なっていけば、どんなにか人は感受性が豊かになるであろう。

偉くなるとか、金持ちになるとか、夢は決してそういうことではない。願うのはただつつましい幸せ。ひな菊たちのように歳月が流れても幼馴染同士で響き合うことは、歩む人生できつとかけがえのないものに違いない。吉本は小説でそう言っているような気がする。

だから記憶なのである。一日一日、一つ一つの体験や出来事を大切にしていきたい。

朝起きていきなりスマホをチェックするZ。毎日30分で済むということはない。気になる情報を次から次へとチェックしていくと1時間はあっという間に過ぎる。

下手をすると知らぬ間に情報の渦に巻き込まれ、頭の中には何も残っていない状況に陥る。

■情報の砂なだれにあえぐ

思い出す小説がある。作家安部公房（1924～93年）の『砂の女』（新潮社、1962年）。男が昆虫採集のため海辺の砂丘へ出掛けたところ、砂穴に埋もれていく一軒家に閉じ込められてしまう。脱出をいろいろな手法で試みるが、女は逆に穴の中にとどませようとあの手この手を尽くす。失敗を何度も繰り返すうちに男は劣悪な環境に慣れていく。

やがて脱出する機会が訪れても積極的に逃げようとしなくなる。砂の生活への順応である。

男の心模様と閉じ込められた状況を表す箇所を引用する。

くしかし……なぜか、確信は持てなかった……しめつけるように、彼をとりまく、砂の壁を見ていると、さっきの、よじ登ろうとしてしたみじめな失敗が、いやでも思い出されてくる……もがくばかりで、なんの効果もない、全身を麻痺させるような無力感……ここはもう、砂に侵食されて、日常の約束事など通用しなくなった、特別の世界なのかもしれない……疑えば、疑う材料はいくらでもあるのだ……（中略）彼のために、あらたに石油罐とスコップが用意されたことが事実なら、知らぬ間に縄梯子がとりはらわれていたことも事実だし、また、女が一言の弁明もせず、薄気味のわるいほどの素直さで、易々として生け贄の沈黙に甘んじていることも、事態の危険性を裏付けていると考えられはしまいか？（中略）つづく小さな砂のなだれがあった。>（新潮文庫39刷より掲載文のまま）

生まれてずっと砂まみれの生活環境は当たり前というZの日常と実に似てはいまいか。ただ年長者たちと接すれば接するほど「あまりスマホばかりを見るなよと言われて、見直しが必要かなと思うときもある。しかし、改めようと思ってもなかなか脱出できない。そうこうしていると情報がどんどん入ってくるし、それを消費していくばかり」と分析する。

砂かけをいくらやっても終わらない。砂なだれのなかでZは暮らしている。

安部は社会の先行きを見通したかのような作品を数多く残している。『箱男』（新潮社、1973年）はその一つである。それはZの日常と符合するところが結構あって驚く。いや未来を暗示しているようで怖くなる。

あらすじを説明する前に舞台設定が奇想天外で度肝を抜かれた。主人公の男は段ボール箱を頭から腰まですっぽりかぶり街をうろつく。箱にはのぞき窓を設け、街と人の様子をじっと見つめる。

男は正体を消すことで「匿名性」を帯びる。何者なのか分からなくなり、帰属性を放棄するのである。引き換えに社会の隅々に入り込んでいく自由を得る。そこへいつしかもう一人の箱男が現れる。箱男同士の関係はやがて錯綜し、互いに「見る」「見られる」という世界に入り込む。

■インターネットの荒野

現代、インターネットの世界は箱をかぶってのぞく荒野と言えまいか。SNSはユーザーネームやアカウント名さえ持てばまさに匿名性を手に入れられる（注・フェイスブックはつながっている相手が誰なのか常に分かるようにするため、普段使っている名前をフェイスブックのアカウントで使用するようにしている）。いわばのぞきの世界に足を踏み入れ、現代社会を見つめる。

<箱の中は暗く、防水塗料の甘い匂いがした。なぜか、ひどく懐かしい場所のような気がした。いまにも辿り着けそうで、手の届かない記憶。いつまでもそのままのままだった。（中略）翌日、勤めから戻ると、苦笑交じりにナイフで箱に覗き窓をつけ、こんどは箱男ふうの頭からかぶってみる。（中略）三日目。多少落ち着きを取り戻し、覗き穴から外の様子を眺めてみた。

（中略）すべての光景から、棘が抜け落ち、すべすべと丸っこく見える。すっかりなじんで、無害な物になり切っていたはずの、壁のしみ……乱雑に積み上げた古雑誌……アンテナの先が曲がった小型テレビ……その上の吸い殻があふれかけているコンビーフの空罐……そうしたすべてが、思いもかけず棘だらけで、自分に無意識の緊張を強いていたことにあらためて気付かせられたのだ。>（新潮文庫69刷より掲載文のまま）

一般人から箱男に変わっていく心の変化がよく読み取れる。新しい世界に踏み込んでいく高揚感とでも言っていいたらう。SNSも浸れば浸

るほど、さまざまな人と出来事に遭遇する。同級生の誰と誰がつながっているのか、すぐに分かる。人間関係図まで頭の中で整理できて、Zは瞬く間に引き込まれていく。

加えてZは自分を世間にさらけ出したいとは思わないで生きている。「何か間違っても発信したら槍や矢が飛んでくる」とわきまえる。だからめったに自ら発信しない。どこの誰だか分からないように、そう、息をひそめて生きている。

ここまでZが普段どのように SNS と関わっているかを描いてきた。その生態はどこか「のっぺらぼう」の容姿を思い浮かべられるかもしれない。匿名希望者なのだからまさにそうであるのだが、目を凝らして見てみるとどうも違う。何とも「誠実」な人柄がにじみ出ている。

SNS はフェイスブックをはじめ世界とつながるためにはある程度、自分の素性をさらけ出す必要がある。何といても世間に「承認」をしてもらわなければいけない。つまり「見られている」という前提で「見る」のである。受動と能動の使い分けがきちんと整理できている。

ここ数年、若者がショッキングな映像を撮って SNS で発信し耳目を集めるが、そういう事案はほんの一握りである。同世代のZも言う。「愉快犯でしょ、あれは。注目を集めて喜びたいだけ。過激映像ははまったら、犯罪に近いこともやりかねない」

「いいね！」獲得のために人生を棒に振るなんて馬鹿げていると知っている。

■発信と受信の狭間で戸惑う

情報の意味するところを十分に理解するZ。しかし、明らかに欠落する部分がある。前述したが、発信し表現するという行為が受信に比べるとはるかに少ない。

写真・動画共有アプリ「インスタグラム」で月2回程度投稿するZによると、情報発信の動機や内容は「投稿すれば『生きてるぞ〜』と数少ないフォロワーに伝わる。うん、存在証明。昼や夜のご飯、それに街中のちょっとした風景とか、誰にも迷惑の掛からない、差し障りのない写真を撮る。学校を撮る？ 文句が来るかもしれないしヤバイ」ということらしい。慎重、謙虚、誠実。ほほ笑みつつスマホの画面を見るZの実像がそこにある。

一方、Zは大学で学ぶ取材・報道関係の科目で他者とのコミュニケーションの必要性を説かれていることも承知している。

Zはそこで振り返る。かつて大学近くのショッピングセンターの駐車場を舞台に行った授業実習で、あるテーマについて住民の声を拾ったとき、決められた人数分、文章のボリューム分はこなせたと思っている。とはいえ、聞き取った内容が果たして「あれでいいのだろうか」「（取材に応じてくれた人は）ああいう趣旨だったのだろうか」と今でも胸につかえている。

発信することと声を受け止めることはきつとコインの裏表である。Zがそこに気付くかどうか。今後のメディア生活の在り方が問われている。

■身捨つるほどのメディアはありや

一つの答えを示すような本がある。『東北モノログ』（いとうせいこう著、河出書房新社、2024年）は作者が東日本大震災を体験した人たち17人を福島、宮城、岩手、山形に訪ね歩き、その声を一人語りとしてまとめ上げた。

見知らぬ人から個人的体験を聞き出すのは至難の業であったろう。一人ひとりを読み進めると、実に多様な「生」が浮き出ている。これらが活字で表現された背景には作者がやはり現場に向いて語り掛け、静かに耳を傾けたからにはほかならない。

いとうは取材と執筆の苦労をこう語っている。「人間の経験には訪ねて行かないと出てこない何かがある。そこに、ものを伝える原形が存在すると思う」（『被災者の声残したい／いとうせいこうさん登壇／「東北モノログ」刊行記念イベント』河北新報2024年2月25日23面）

現場の風を受け、そこに暮らす人と語り合っただけこそ疑問が生まれ、そして求める答えに近づける。生きた情報に接して刺激を受け、表現に結び付けてゆくことが求められている。

本稿のタイトルに本歌取りとして借用させてもらった短歌の作者、寺山修司はかつて『書を捨てよ、町へ出よう』（1967年刊、角川文庫）とのタイトルで評論集を著した。いとうの今回の本を併せて読んでみると、現場に赴くということがメディアとの向き合い方の通奏低音であると改めて教えられた気がする。

Zよ、スマホの電源を一日に少しだけでも切ってみよう。ニュースへの耐性や消化力がきつと増す。

<マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや 寺山修司>（1958年刊、歌集『空には本』所収）

<マッチ擦るつかのま書に闇ふかし身捨つるほどのメディアはありや Z>

【謝辞】

本稿の執筆では仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科に在籍する青木瞭太さん、阿部さゆきさん、大上晃生さん、門田修馬さん、菅野烈さん、衣川将太さん、齋藤倅太さん、澤田翔琉さん、久積諒太さん、山田廉さん、吉田行慶さん（いずれも2年生）に協力を願い、日常生活でのメディア接触についてさまざまな観点から取材させてもらった。何とも楽しいひと時であった。この場を借りて謝意を伝える。